

## 特集号「人類進化と新生代後期の環境変化」 はしがき

岩 田 修 二\*

### Introduction to the Special Issue on “ Human Evolution and Environmental Changes in the Late Cenozoic ”

Shuji IWATA \*

人類進化とそれをとりまく環境の変遷は、古くから、地学と地理学の重要な課題である。地学と地理学が、人類学・古生物学・鉱物学・堆積学・地形学・先史学・古生態学・地図学・空間分析などに細分化した現在でも、人類進化と地球環境変化への関心、とくにその悠久のシナリオは伝統的な地学や地理学の核であると筆者は確信している。地学雑誌の英名は Journal of Geography であり、地学を中心に人文地理学を含む幅広い複合領域をカバーしている。このような地学雑誌には、人類と環境に関連する最近の研究の進展を知りたいと考える多くの読者が存在する。

最近、アフリカでの化石の発掘や、遺伝子研究による新知見など、人類進化に関する新しい情報が続々と届いている。また、地球規模での古環境変化の解明も進み、第三紀末以降の地球環境の最新事実が蓄積されている。そこで、研究展望論文の特集号を企画することにした。人類学や地球環境を専門としていない分野の読者にも最新情報をわかりやすく提供するのがこの企画の目的である。編集委員会では、人類の形質的な進化、それと切り離せない環境の変化、それらを基礎に進展した人類文化について総合的な視点から原稿を依頼した。

ここには9論文を収めることができた。掲載順に ~ と仮に番号をつける。まず、日本人による化石の発見も相次ぎ、研究進展が著しい ヒト上科と ヒト科の出現、ホモ属までの進化が詳説される。では遺伝子研究からみた現生人類誕生後の東ユーラシア人の分化が説明される。氷期を人類がいかにして乗り切ったかは多くの関心を惹

くが、では考古学からの貢献がくわしい年代論とともに解説される。は、人類文化がどのように受け継がれ、伝わるかについての科学的な研究の紹介である。第四紀の古環境復元で最近もっとも成果が上がっているものの一つは氷床コアによる研究であるが、ようやく日本も南極での掘削を通じて貢献できるようになった。いっぽう、山岳氷河の変動は、高緯度の氷床とは異なった変動を示すことが明らかになってきた。最終氷期の海面がどのくらい下がっていたか、いいかえると氷床の大きさがどのくらいであったのかは難問であった。はそれにひとつの解答を与えた。花粉分析は古くから確立した環境復元の方法であると認められているが、必ずしも定量的ではなかった。は定量化の試みである。

しかし、残念ながら、いろいろな事情があり、依頼したすべての原稿を掲載する事ができなかった。第三紀からの南極氷床発達史、原人から現生人類への変化、文明の誕生、アフリカの環境史、80万年前の気候体制の変化などの論文は掲載できなかった。これらは別の機会にぜひ地学雑誌に掲載したい。

いろいろ不十分な点があるが、本特集号によって、人類進化と地球環境変化に関する最近の研究の進展が理解されることを期待している。忙しい中、力のこもった論文の執筆に時間を割いていただいた著者のみなさまに心からお礼を申し上げる。

本特集号の編集には、地学雑誌編集委員会の岩田修二・鈴木毅彦と、編集委員会外から松浦秀治（お茶の水女子大学・自然人類学）と塚本すみ子（東京都立大学・年代測定）があたった。

\* 東京都立大学地理学教室

\* Department of Geography, Tokyo Metropolitan University